

## 「壱岐」の島をめぐる

阪急交通の「大自然・歴史・新鮮な海の幸を味わう たっぷり壱岐二日間」という長い名前のツアーに、友夫婦と一緒に参加した。隠岐、五島に続き島の歴史に触れる旅である、同時に海の幸も期待できそうな旅と思われた。それと、世間の三連休に旅するなんて初めてのことである。

### 3時間20分で博多へ

東浦発 5.58 の一番列車に乗り、名古屋駅着 6.39。集合は 6.40 のため事前に連絡しておいて急ぎ駆けつけるも、いくつものツアー団体が集まっていてどのグループなのか分からない。そこへ阪急の制服を着たお姉さんがきたので「壱岐のグループはどこですか」と聞く。彼女が案内してくれた先に「浪崎さん」と書いた札を掲げている添乗員が見えた。やれやれすべりこみセーフで一安心。座席札をもらってホームに出る、列車は名古屋始発のぞみ 97 号で、定刻の 7.06 に発車。14 号車 7DE、8DE の席に落ち着いて、朝飯のおにぎりを食べながら新幹線の旅はスタートした。

京都、新大阪、新神戸、岡山、広島、新山口と停車して海底トンネルをくぐり九州に入る。小倉に停車すると次は終点の博多で、10.27 到着した。ここからバスで唐津東港まで行き、フェリーに乗って壱岐の印通寺(いんどうじ)港へ向かう予定。バスに乗り込むと 40 名のグループで、添乗員さんはとても明るい小笠原さんと分かったしだい。10.45 博多駅を出て西九州道を順調に走る、でも料金所では渋滞ができています。さらに国道 202 の「かもめロード」というしゃれた名前の有料道路を走るが、ここも料金所では渋滞ができています、なぜ ETC がいないのか? 後で聞いてみると、福岡の高速道路ではない有料道路には ETC は設置されていないという。

港へ行く前にマリンセンターおさかな村に立ち寄り昼食である、団体さん用の広い会場でお刺身とカキフライご膳をいただく。まずまずの料理でおなかも満足し外に出る、気がかりなのはお天気だけ。予報では間違いなく雨に

降られそうなのだ、これまでは晴れ男の異名を持つ友のおかげで? こんな予報のときでも雨に降られたことがないのだ。でも食事後に表に出てみると、間違いなく雨が降っている。問題は壱岐の現地ではどんな按配なのか? 気になるところだ。



唐津東港ターミナル



遠ざかる唐津城

## 1 時間 4 5 分の船旅

12.50 にマリンセンターおさかな村を出て唐津東港へ、13.20 の印通寺港(いんどうじこう)行きのフェリー「あずさ」に乗り込む。広い畳敷きの席が多かったが、一番前の部屋の椅子席に落ち着いた。ゆっくりと岸壁を離れ港内を出ると右手に唐津城が見える、それもどんどん遠くになり直に見えなくなる。湾の外に出ると、曇り空の下に静かな波間が見えるのみのとなる、したがって、景色を見ることはなくテレビを見て過ごした。

ほとんど揺れを感じることもなく予定どおり 15.05 に印通港に入港、さっそくバスに乗り込み壱岐の観光に出発する。今日の観光は焼酎工場の見学と、壱岐のシンボルといわれる「猿岩」を訪れる。

## 「壱岐」の歴史は古く大陸文化の中継地

出発前に壱岐を調べていて気がついたのは、意外にも長崎県に属している

ことだ。福岡から北西に80km、佐賀県の東松浦半島から北北西に20kmの位置にある。壱岐市は壱岐島のほかに四つの有人島と17の無人島からなり、人口は約29,000人。暖流の対馬海流が流れ、比較的温暖な気候である。春先に吹く南寄りの風を春一番というが、これは安政6年(1869)2月13日に、壱岐の漁師53人がハエナワ漁にでて強風のため遭難した。この時の風を春一とか春一番と呼んだ、このように壱岐の漁師たちが呼んでいた言葉が気象用語になったものである。

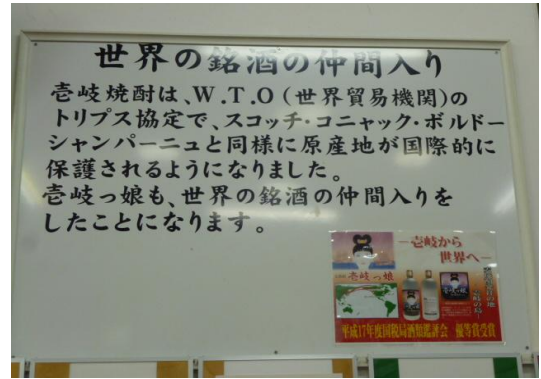
ここまでは分かるのだが、歴史となるとなかなか難しい。壱岐についてはこんな説明が……①古事記に伊伎島と記され、国土誕生の際日本で最初にできた大八島の一つとされる ②中国の三国志に書かれている魏志倭人伝(ぎしわじん でん)に、邪馬台国の支配下にあった一支国(いきこく)が存在したと記されている ③律令制下においては壱岐国に属した……というもの。このことから壱岐を一口でいえば、大陸からの文化の中継地だった。つまり、対馬や壱岐に伝わった大陸の文化はここから九州に伝わった。

## 400年の伝統「壱岐麦焼酎」の工場見学と試飲

壱岐が何故長崎県なのか、若いバスガイドさんが説明してくれたのは……昔は長崎県の平戸藩が支配していたことから、長崎県に属しているのだという。でも、壱岐と長崎県を結ぶ航路は一つもなく、福岡県と佐賀県を結んでいるのだ。ちょっと不思議でもある、そして、長崎県には400余の古墳があるとされるが、そのうち壱岐には270の古墳が確認されている。大陸の文化は海から島伝いに伝わったものであり、古墳を調べることで当時の様子を再現した「原の辻遺跡」がある。又、「一支国(いきこく)博物館」では壱岐に伝わった大陸文化の歴史や、人々の様子を分かりやすく展示している。そして、壱岐の名産は焼酎でそれも麦焼酎である。壱岐に蒸留の技術が伝来したのは400年前といわれ、麦焼酎は壱岐が発祥地という。これは壱岐が穀倉地帯として開け、かつ地下水にも恵まれていたからである。他に米焼酎の発祥地は熊本で、イモ焼酎の発祥地は鹿児島だという。壱岐の焼酎は麦が2/3、米が1/3で造られる、そんな壱岐名産の焼酎工場「壱岐っ娘」を生産する壱岐の蔵酒造株式会社を最初に見学した。



壱岐っ娘の工場



世界の銘酒へ仲間入り

港から10分も走り到着、履物を草履に履き替えて案内されたのは、金網のしっかりしたエキスパンダメタルでできた二階。お酒の匂いが強烈だ、蒸留釜を上から見学し説明を聞くも酔っぱらってしまいそう。早々に退散して次は試飲である、まずは最高級品壱岐っ子から勧められる。試飲というが、要は販売コーナーであり、かつPRコーナーで焼酎の作り方など掲示してある。さらに「W.T.O のトリプス協定でスコッチ、ボルドー、シャンパーニュと同様に原産地が国際的に保護されるようになりました。壱岐の焼酎も世界の仲間入りをしたこととなります」と掲示されている。

次に玉姫、壱岐の島と勧められる、しかし私にはその違いがよく分からない。妻はけっこういける口なので、いろいろ試飲していたようで、私にもこれがうまいとか言っていた。それでも自分のお土産に壱岐でしか販売していないという「壱岐の島」の四合瓶を買い求めた。帰ってからゆっくり、ちびちびやる方が私には似合っている気がする。

## 猿岩と黒崎砲台跡

16.00 に焼酎工場を出て壱岐のシンボルともいわれる「猿岩」へ向かう。島の南北を縦断する国道382と交差する亀石の交差点を過ぎると、珍しい地名の所を通る。「鯨伏」と書いて「いさふじ」という、鯨の文字があることは、昔壱岐では捕鯨が行われていたのだ。その技術は紀州の熊野から伝わったという。島の北端にある勝本町には、捕鯨で財をなした「土井いちべえ」と言う人

が豪邸を構え、7 m の塀を造って屋敷をとりまいていた。でもその塀は屋敷を守るというより、大勢いたおめかけさんを外から見えないようにするためだったと言われていたとか。

つぎに二つある温泉のひとつ湯ノ本温泉を通る、ここは壱岐の西部に位置し、神功皇后が応神天皇の産湯をつかわせたとの伝説があり、子宝の湯として親しまれ、泉温は69℃ある。旅館6軒、湯治温泉が3軒ある。そして黒崎半島の先端にある壱岐のシンボル「猿岩」に16.30到着した。雨が少し降り続けている駐車場に立つと、海の方に見える大きな岩は確かに猿の顔だった。人の手を加えない自然の形なのにびっくりする。高さ45mの海蝕崖の玄武岩でその姿はそっぽを向いた猿の顔そのものだった。



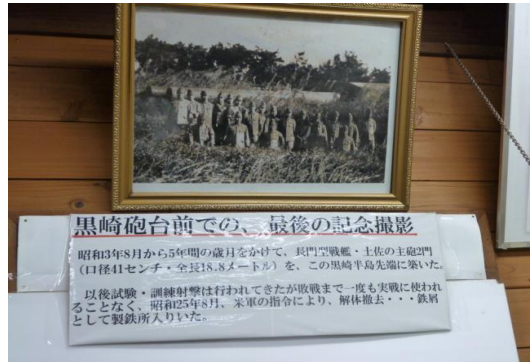
猿岩にて記念撮影

この猿岩の駐車場からほんの少し上った所に「黒崎砲台跡」が残されている。ガイドさんが案内してくれた先に現れたのは、地下に造られた直径が10m以上もあるコンクリートの穴だ。これは戦艦「土佐」の主砲2門を置くために、昭和3年8月から5年をかけて建設したもの。

口径41cm、全長18.8mの大砲を有するトーチカを黒崎半島の先端に造ったのだが、一度も実践に使われることはなく昭和25年8月米軍の司令により撤去された。大砲は鉄くずになったが、コンクリートがあまりに頑丈なため、壊すのが大変でそのまま残されているという。

駐車場脇の茶店に当時の写真が掲示されていたが、大きな鉄の筒が地を這うように設置されていたのだった。このほかにも壱岐名物のビラが掲示されて

いた、「かじめ」は海の山芋といわれる海藻とか、ゆずの皮を煮込んで作った「ゆべし」など。お手製のきれいなビラだった。



黒崎砲台跡と記念写真

ここまでで一日目の行程を終え、ホテルに 17.20 頃到着した。

## 朝からお買いもの

二日目は 8.00 にホテルを出発して 10 分も走ると、島で一番大きな「あまごころ本舗」という海産物のお店に到着する。言わずと知れたお買いものタイムである、ここの一押しは何といっても「ウニ」。ウニの漁獲は 5~10 月で海女さんの素潜り漁の風景が風物詩となっている、ウニの種類などを説明してから、順番に試食させて売上 UP を狙う作戦。多くの人がまぼろしのウニとか、究極のウニ、イカウニ、汐粒ウニをお買い上げになった。我が家ではとても買えそうにない、妻はお汁の具にするアオサとあごのふりかけを娘たちの土産に買い求めた。

店内を見て回ると、島で作られるすべての焼酎が並ぶコーナーや民芸品の鬼凧が飾られていた。この凧には次のような言い伝えがあると言う.....昔大和朝廷成立前の壱岐の島には、五万もの鬼が住んでいて人を食らい島人を苦しめていました。命を受けた百合若大臣は従者とともに島に上がり、鬼の首を次々はねていきました。でも首領の鬼はなかなか手ごわくてやっとのことで首をはねました。ところが、その首が百合若大臣の兜にかみつきました。



麦焼酎コーナー



鬼風

その時の様子を凧に描き、春の野上りの時などに島の空高く上げる風習が今も残っていると云います。兜にかみついた凧は五島で買い求めたので、今回は買わずに写真に撮って良しとしました。

## 島内一高い「岳の辻」展望台へ

このあと島で一番高い 212.8m の岳ノ辻へ向かう。展望台からは対馬や佐賀の東松浦半島を望むこともできると言うが、今回は残念ながら小雨がぱらつくお天気。8.50 に駐車場に到着し展望台へ向かうと、関西大学・慶応大学教授で国文学者・民俗学者の折口信夫の歌碑がある。彼は歌人としても知られ大正 10 年と 13 年に来島し「葛の花 踏みしだかれて 色あたらしこの山道を 行きし人あり」と詠んだ。でも私にはこの詩の良さが理解できない、歌碑を過ぎると狼煙台が復元されており、その隣には龍を神とする龍光大神が祀られていた。そのあたりが頂上で木製の展望台が設置されている、緑豊かな島内の村や入り組んだ海岸がかすんで見える。

ちよっぴり残念だがすばらしい大パノラマも、お天気が悪いとその良さが半減してしまう。小雨降る山の上では気温も下がり、少々冷えるので 20 分の滞在で次の見学地「原の辻遺跡」へ向かう。



展望台と島の景色

## 壱岐のいろいろ

山を降りると勝本～亀石～郷の浦八畑～印通寺を結ぶ国道 382 を走り、一旦印通寺まで戻る。その間にバスガイドさんが壱岐についていろいろ教えてくれた.....

- ①島内には二つの火力発電所と風力発電もある
- ②島内には二つの高校がある、普通科と商業化
- ③ダムは 6 か所ある
- ④浦(うら)---は漁村
- ⑤振(ふれ)---は農村
- ⑥辻(つじ)---は高い所
- ⑦ほげ---穴があいていること→ほらほげ地蔵
- ⑧ガソリンは 163 円/L
- ⑨車は 20.000 台余ある
- ⑩印通寺町と言うのはお寺の名前からつけられた
- ⑪電力王と言われた「松永安左衛門」の生家と記念館が印通寺にある
- ⑫じるい---ぬかるみのこと、私の地元生路でも「じるい」は使われている
- ⑬いっけよい...ものすごくと言う意味
- ⑭〇〇〇と...語尾に「と」をつけて話す

## 国の特別史跡「原の辻遺跡」

9.20 平たん部の畑の中にある遺跡跡に到着。今から約 2000 年前の弥生時





原の辻遺跡



日本最古の棹ばかりの「おもり」

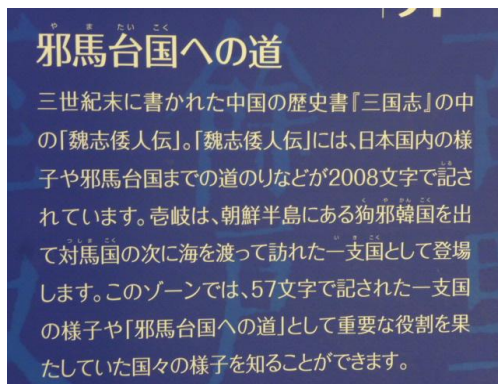
代に栄えた多重環濠集落。「魏志」倭人伝には邪馬台国をはじめ、さまざまな国の様子が記されています。記された国の中で、国の場所と王都の位置が両方特定されているのは国内で唯一ここ壱岐・原の辻遺跡のみという。

57文字で壱岐に関する情報が記されており、豊かな自然に恵まれていること、多くの人が壱岐で生活していたこと、海を舞台に積極的に交流していたことについて書いてあります。ここは内海湾からさかのぼる幡鉾川沿いにあり、遺跡からは東アジア最古の船着き場跡や、大陸との交流を物語る遺物が多数発見されています。玄界灘に浮かぶ壱岐は大陸や朝鮮半島と日本を結ぶ架け橋として、重要な役割を果たしていたことが分かる遺跡として、遺物でいうと国宝に当る「国の特別史跡」に指定されました。現在は復元した古代住居群と体験広場からなる「原の辻一支国王都復元公園」となっている。小雨降るなかを古代の住居を見て回る、この古代住居は発見された柱跡と同じ位置に建てられているという。藁ぶき小屋がいくつかあり、高床式の食糧庫にはねずみ返しがつけられている。さらに一段と高い物見やぐらもある、その中に一つ興味を引くものがあった。「日本最古の権」という見出しで説明されていたのは、棹ばかりに使うおもり(権)が発見されたのだ。このことは交易品のような貴重なものを量ったことの証であろう。その説明板には英語のほかにはハングル文字の説明もあった。

デザインも展示もすばらしい「一支国博物館」

次は原の辻遺跡から見える小高い丘の上にある一支国博物館に向かう。9.45 に到着した博物館はとても斬新なデザインの建物で、自然との調和をモットーに造られたという。到着前の説明では、4F が展望コーナー、3F には喫茶コーナーがあると聞き嬉しくなった。これまでコーヒーの飲める機会がまるでなかったので、まずは展望コーナーへ上がって景色を堪能してからコーヒーでも飲んでゆっくりしようと思った。エレベーターで上がった高さ 85m の展望台は 360 度の大パノラマ、高い山はなく原の辻遺跡も目の前に広がり、古代貿易船が出入りしていた海を眺望できる。いただいたパンフレットを見るとここには二つの国指定重要文化財がある、ひとつは「石造弥勒如来坐像」で、仏像の背面に「日本国壱岐嶋」と彫られている貴重な資料。二つ目は「金銅製亀型飾金具」で笹塚古墳出土の馬具。世界で唯一の亀をかたどった飾り金具という。

このあとコーヒーをとってエレベーターに乗ると、3F は止まらず 2F に止まった。見ると 3F へは階段が続いていた、それでは先に展示を見ることにして順番に進んで行くと、ボランティアガイドのおばさんがいろいろ説明してくれた。はじめは壁一面に漢字のみが並ぶ「魏志」倭人伝の一支国と弥生の国々を紹介するコーナーで、2008 文字から一支国への旅が始まる。



一支国の案内と博物館の屋根

でもこれを見ただけでは難しく、ガイドの説明がないとよく分からない。とてもありがたいので熱心に聞いていると、途中ではシアターの上映時間だからとシルクロード・ビューシアターに案内してくれた。上映が終わるとさらに続きの古墳ゾーン、古代船と原の辻の古代人の暮らしを描いたジオ

ラマコーナーへと次々に案内してくれる。熱心に説明していただきそれは良かったのだが、おかげでコーヒーは飲めなかったし、ゆっくりトイレへいく間もなかった。

東浦のガイドでも、お客さんの予定時間をきちんと守って案内するようにと心がけているが、話したいことがたくさんあり一生懸命になると、相手の都合を忘れかねないので気をつけないといけない。

## 「はらほげ地蔵」と左京鼻

11.00 に一支国博物館を出発して次は「はらほげ地蔵」に向かう。八幡浦の海中に祀られている六地蔵で腹部を丸くえぐられていることから名付けられたという。天の六道である天道、人道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道において群衆を苦しみから救うとされている。内海湾を回って八幡半島の付け根にある港に到着する。海には養殖の筏が浮かんでいるのが見える、港の前の通りには「はらほげ食堂」の看板がある。お地蔵さんの名前を付けている食堂だが、実はここにお地蔵さんはあった。それが区画整理のため移転させることになり、海中を好まれるために満潮には潮水に浸かってしまう今の場所になったそうだ。この地区は海女漁が盛んであり、浦中の安泰と海の漁の安全と大漁を祈願する。小さなお地蔵さんが6体、赤い頭巾と前掛けをかけ海に向かってたたずんでいる。



はらほげ地蔵

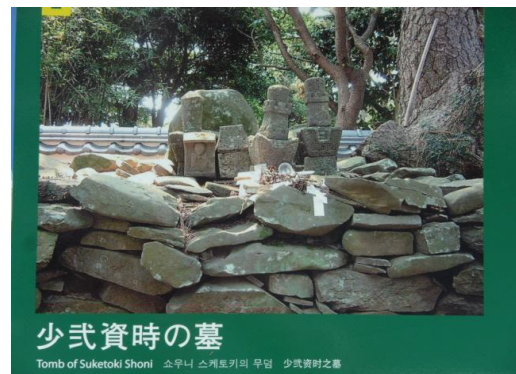


左京鼻

10分程で見学を終わり予定ではランチタイムとなるが、少し早いので半島先端の「左京鼻」に寄ってくれることになった。11.25 左京鼻に到着、バスを降りて海沿いに進むのだが強い風が海から吹きつける。この左京鼻のいわれは切り立った石があるので「石橋」から出た言葉ともされるが、もうひとつは江戸時代に大干ばつに襲われた際に、陰陽師の後藤左京が雨乞いをして満願の日には豪雨が田畑を潤した。この後藤左京の名前と伝えられているとか。強い風が吹きつけるので高い木はなく、草原と玄界灘の白波が美しい。岬の突端には赤い鳥居があり小さな祠もあった。

## 蒙古を迎え撃った少弐資時(しょうに すけとき)

すべての観光を終え 11.50 ランチは壱岐牛の焼肉ご膳を堪能した。食堂は芦辺港のすぐ近くだったので、食事の後ターミナル付近を散策した。そこでガイドさんの説明にはなかったことを発見した。馬に乗った武将の像があり説明板があった、壱岐は1274年蒙古軍と高麗軍の連合軍との戦い文永の役、1281年に対馬を襲った蒙古東路軍を迎え撃った弘安の役と二度も蒙古の襲来を受けた。弘安の役の時に勇ましく戦い19歳にして壮烈な最期を遂げた壱岐守護代少弐資時の像だった。



少弐資時の像と墓

この像は元寇720年を記念して建てられたもの。芦辺港から少し北へ行った所に少弐公園・弘安の役跡がある、そこに少弐資時を祀る壱岐神社があり墓もある。このほかに元寇の礎石というものがある。また壱岐の各地には蒙古

襲来で命を落とした人々を埋葬した千人塚が点在し、蒙古襲来の被害が大きかったことを物語っている。

こうして壱岐市 4 町の勝本町、郷の浦町、芦辺町、石田町の内勝本町以外の三町を巡り、印通寺港に戻って 15.05 のフェリーで唐津東港へ戻り一泊二日の旅を終えた。